空間・社会・地理思想 第2号 pp. 79〜97, 1997
Space, Society and Geographical Thought, No.2

空間から場所へ、そして再び
—ポストモダニティの条件に関する省察—

デイヴィド・ハーヴェイ*
（中島 弘二** 訳）

David HARVEY
From space to place and back again: Reflections on the condition of postmodernity
In BIRD, J. *et al.*: *Mapping the futures : Local cultures, global changes.*
Routledge, 1993, London and New York, pp. 3-29.

ニュージャージー高速道路を走る車を数えながら
みんなアメリカをさがしにいったんだ
みんなアメリカをさがしに
（サイモンとガーファンクル）

序　論

私は『*The Condition of Postmodernity*』の結論において、史的唯物論とマルクス主義の危機と想定されているものを克服するための四つの展開の領域を提示しておいた（Harvey, 1989, p. 355）。

1. 差異 difference と「他者性 otherness」を、（階級や生産諸力のような）より根本的なマルクス主義の諸カテゴリーにつけ加えられるものとしてではなく、社会変化の弁証法を把握する試みのまさに始まりから普遍的に存在するものとして取り扱うこと。
2. 諸イメージと諸言説の生産は、あらゆる社会秩序の再生産と変換の一部分として分析されねばならないような活動の重要な一局面であるという認識。
3. 空間と時間の次元が重要であるという認識、社会的行為のレアルな地理的事象 geographies が存在するという認識、すなわちメタフォリカルであると同時にレアルな権力の領域や諸空間が存在し、それらの領域や空間自体のあり方と資本主義的発展の総体的論理の中でのあり方との双方において理解されねばならないような無数の差異の場所が存在するという認識。端的に言えば、史的唯物論はその地理的事象を真剣に取り上げねばならないということである。
4. 史的－地理的唯物論は閉ざされた固定的な理解の体系ではなく開かれた弁証法的な探究様式であるという理論的・実践的認識。例えば、資本制生産様式についてのマルクスの理論は全体的真実の表明ではなく、特定の諸相と諸形態においてと同時に一般的にも資本主義を特徴づける歴史的・地理的真実との折り合いをつけようとする一つの試みなのである。

私が『*The Condition of Postmodernity*』において取り上げたわずか一つのトピックに立ち戻り、全体的議論にとってのその重要性を明らかにし、さらに精緻化しようと試みるのは、以上のような意志においてである。私は空間と場所との間の移行的関係をより仔細に検討し、そしてなにゆえ交換と移動とコミュニケーションの空間的障壁が減少しつつあるこの世界において、とりわけ場所に根ざしたアイデンティティの構築が無意味であるどころかますます重要となってきているのかを説明したいと思う。

* オックスフォード大学　** 大分大学教育学部

場所の問題

解明の最初のポイントが多くのことを不明瞭にしてしまうことを、私は危惧する。環境 milieu、ロカリティ、立地、ローカル、近隣、地域、領域といった類の言葉は、すべて場所 place にかかわる根源的性質に言及したものである。その他にも都市や村落、街、巨大都市、国家といった用語があるが、それらは特定の種類の場所を指し示すものである。さらにまた家庭や炉辺、「なわばり turf」、コミュニティ、民族、景観などの言葉はきわめて強い場所の含意を有しており、場所を欠いては語ることがむずかしいであろう。「場所」はまたきわめて多様なメタフォリカルな意味を有している。われわれは、社会生活における芸術の位置 place や社会における女性の立場 place、そして宇宙におけるわれわれの位置 place について語る。われわれはそうした諸観念を、自分の立場を知る knowing our place ことで、あるいは他者の愛情や尊重の中に拠り所を見つけると感じることで、心理学的に内面化しているのである。われわれは人々や出来事や物事をそれらにふさわしい場所に位置づけることで規範を表現し、そして被抑圧者がそこから自由に語ることのできる新しい場所を定義しようと格闘することで規範を打倒しようとするのである。場所はわれわれの言語の中でももっとも多層で多目的な言葉の一つにちがいない。

このような多大なる意味の混乱が場所のいかなる理論的概念をもすぐに疑わしいものとしてしまう一方で、私は意味の一般性や両義性、多層性というものを有益なものとみなしている。それはたぶん社会的、政治的、空間的な諸実践の相互関係について多くのことを示してくれるような、ある基層的な統一を示唆しているのである。それゆえ、私は主として場所の領域性に焦点を当てるつもりだが、場所の意味の緩やかさは私の探究を他の意味とのつながりへも向かわせるであろう。例えば空間的障壁の解体は場所についての古い物質的・領域的な空間の定義の基盤を掘り崩す一方で、まさに解体という事実（私は『*The Condition of Postmodernity*』においてそれを「時間－空間の圧縮」の脅威と呼んでおいた）が、排他的な領域的行動によって場所に新たな物質的定義をもたらすようなメタフォリカルな心理学的意味に対する疑問に新たな光を当ててきたのである。このような探究は（ポストモダンのレトリックにおいて多用される）「他者」や「差異」という困難な問題を明らかにするのを助けてくれるにちがいない。なぜなら場所に根ざした領域的アイデンティティは、とりわけそれが人種や民族、ジェンダー、宗教、そして階級的な差異化と合成されるとき、進歩的な政治的動員と反動的な排他的ポリティクスとの双方にとってのもっとも普遍的な基盤の一つとなるからである。

さらにまた、このような探究から得られる一つの理論的課題がある。それは個別性 particularity と差異に向き合っていかにして一般理論を維持し練り上げてゆくのかという問題に関する省察を可能としてくれる。この点に関して地理学者の経験は興味深い。他の社会諸科学が時間に特化した一般理論を取り扱ってきたのに対し、地理学者は場所の種別性と格闘してきたのである。既存の社会理論への空間の取り込みは、それがいかなる種類のものであれ、常に社会理論の力を解体するものであったように思える。地理学者が直面してきた無数の偶有性や種別性、そして「他者性」は、すべての形態の社会科学のメタ理論の基盤を掘り崩すもの（私はそれをあえて「脱構築」と呼ぶ）として地理学者によってみなされうる（そしてしばしばみなされてきた）のである。こうした困難の主たる源泉を突き止めることは容易であろう。われわれは誰も時間の中で自らの瞬間を選ぶことはできず、決定されてしまっている。それゆえ時間は容易に決定論を受け入れてしまう。しかしわれわれは立地に関して選択の幅を持っており、そうした選択は重要である。なぜなら空間編成（建物、都市）の潜在的固定性はそうした選択が（ほんの一瞬ではあっても）時間を凍結する明白な効果を持つことを可能とするからである。その効果は、より容易に特定される時間的変化の諸過程を断片化し粉砕する。このような類の議論は近年の文学理論においても見られる。例えばクリスティン・ロス（Ross, 1988）はフォイエルバッハに習って「時間は弁証法家の特権的カテゴリーである、なぜならそれは空間が許容し調整する余地を排除し従わせるからである」と示唆している。もちろんそこから、地理学は普遍的理論に対しては開かれておらず、種別性と個別性の領域であるという推論が可能かもしれない。しかしながら私自身の見解では、個別性に対する理解の犠牲のうえに多くの普遍的なものが築かれてきた一方で、地理学者が永年

ふけってきた計り知れない差異の世界、不透明な世界の方向へと盲目的に駆け出すことはナンセンスだと考えられる。そこでの問題はメタ理論を書き直すこと、空間－時間における弁証法的過程を明らかにすることであり、すべてのプロジェクトを放棄することではない。社会生活における場所の役割を説明することはこの点において役立つはずである。

そうした道程への第一歩は、場所はその様相がいかなるものであれ時間や空間と同様に（Harvey, 1990 を見よ）社会的構築物であることを主張することである。提起されうる唯一の興味深い問題は、いかなる社会（諸）過程によって場所は構築されているのかという問いである。私は二つの異なる回答を検討することでその問題に対する位置を定め、それからその問題に対する概念的解決を示唆するための三角測量を試みたい。

資本主義のもとでの場所と構築の政治経済学

私はまず最初に、実在する場所の構築を通じた地理的拡張の歴史的軌跡に関する考察から始めようと思う。このトピックに関してはすでに別の所で素描したが（Harvey, 1982, 1985）、ここできわめて概略的な説明を加えておこう。

資本主義は本質的に成長志向であり、技術的にダイナミックであり、そして恐慌という傾向につきまとわれている。それは地理的拡張を通じて一時的および部分的に資本の過剰蓄積（遊休生産能力+失業労働力）による恐慌を克服することができる。この過程には二つの局面がある。第一は既存の空間的諸関係の枠内である場所（地域、国家）から新しく作られた別の場所へと超過資本が移出されうるという局面（例えば最近の海外の不動産開発に対する日本の過剰資本投下の傾向）。第二には「時間によって空間を絶滅」する技術的・組織的シフトを通じて空間的諸関係が変革される局面。そうした変革（高速道路、運河、鉄道、自動車、コンテナ輸送、航空輸送、テレコミュニケーションのインパクト）は（相互に関連しさえすれば）場所の特性を変えてしまい、それによって場所を構築する諸活動と相互作用するのである。

これら二つのどちらの場合にも新たな場所のネットワーク（土地へ埋め込まれた固定資本として構築される）が生み出され、その周りに新たな領域的分業や人々と労働力の集中、新たな資源、採取活動、市場が形成される。その結果生み出される地理的景観は均質には発展せずに、著しく差異化される。不均等な資本投下と急増する地理的分業の単純な論理により、空間における「差異」と「他者性」が生産されるのである。こうしたプロセスにはいくつかの緊張が見られる。まず最初はそれが必然的に（あらゆる形態の資本主義的発展と同様に）投機的であるということである。場所を構築しようとする冒険は投機的なごまかしによりしばしば誤った方向へ進み、苦境に陥ってしまうことがある。チャールズ・ディケンズは『マーティン・チャズルウィット』において、新たな楽園という神話の歴史が今日まで続いているプロセスに対して機知に富んだ警告を発している――陽光降り注ぐフロリダへ退職後の居場所を求めて向かった年金生活者がそこで見いだしたものは、泥沼のまっただ中にあるフロリダであった――。ソーステン・ヴェブレン（Veblen, 1967）は次のように主張した（そして私は彼を基本的に正しいと考える）、すなわち合衆国の総ての集落パターンは不動産投機における一つの巨大な冒険として理解されるべきであると。それゆえ、資本主義による空間の生産の論理において場所の構築が一定 a given であると述べることは、地理的パターンが前もって決定されていると主張することではない。それは場所間競争を通じて事後的に作り出されるのである。

第二の困難は土地開発への投機的投資と他の資本諸形態の移動性との間の不可避的な緊張から生じるものである。土地開発への投資を行った者は、彼らの投資をより有利なものとするような諸活動が生じることを確保しようとする。企業家間の連合はこの目的のために各々の場所における諸活動を積極的に形作ろうと試みる。それゆえローガンとモロッチ（Logan and Molotch, 1987）が示したようなローカルな「成長マシーン」のポリティクスや、各々の場所における経済発展を促進するためのローカルな階級同盟が重要となる。経済的有利性を獲得するべくそれぞれの場所においてそれぞれの場所を通して生じる「社会的ネットワークの形成」は大変複雑であるが、しかしそこには常にある種の連合が、変化しながらも明らかに存在している。しかしそのような連合が常に成功するとは限らない。それぞれの場所間競争が勝者と敗者を生み出すのである。場所間の差異はある程度まで相互に対立するものとな

るのである。

固定性と移動性との間の緊張は全般化された恐慌において噴出するが、それは一定の（資本主義的あるいは前資本主義的）発展段階に応じて形成された景観がさらなる蓄積にとっての障壁となる時にほかならない。その時、新たな輸送とコミュニケーションシステム、物的インフラストラクチュア、生産と消費の新たな中心と様式、労働力と修正された社会的インフラストラクチュア（例えば場所の支配と調整のシステムを含む）の新たな集積等をめぐって景観は作りなおされねばならない。古い場所が減価され、破壊され、再開発される一方で、新たな場所が創り出されるのである。大聖堂のある都市は遺構の中心となり、鉱業地域はゴーストタウンとなり、古い工業中心地は脱工業化され、一方で投機的ブームの街やジェントリフィケーションの進んだ近隣地区が、資本主義的発展の最前線において、あるいは脱工業化されたコミュニティの屍の中から現われてくる。資本主義の歴史は強烈な空間的組織化の諸段階によって区切られているのである。私が『*The Condition of Postmodernity*』において示そうとしたように、1970 年代からこのような強力なうねりが見られ、それは各々の場所とそれらの場所の間における少なからぬ不確実性を生み出してきたのである。

さてここで私は、なぜ場所が過去 20 年間を通じてより重要になってきたのかを説明する最初の切り口に挑んでみたい。

1. 空間的諸関係は 1970 年代以来、根本的に再構成され、このことが資本蓄積のグローバルなパターンにおける各々の場所の相対的な位置を変えてしまった。かつては確実なステータスを持っていた都市の場所は脆弱なものとなり（デトロイトやシェフィールド、リバプール、リールなどを考えてみよ）、居住者はいかなる場所が空間的諸関係と資本蓄積の新たなマトリックスにおいて生き残るように作りなおされるのかを問わざるを得なくなっている。実際の場所の安全が全般的に脅かされるとき、われわれは場所の意味全般について心配するのである。
2. 縮減された輸送コストは生産や商業、マーケティング、そしてとりわけ金融資本を以前にもまして地理的に移動性の高いものとしてきた。このことはより自由な立地選択を可能とし、ひるがえって資本家が資源の量や質および場所間のコストの差異からより多くの利益を手にすることを可能としている。例えば多国籍資本はより収益の高い蓄積を求めるために場所の質に対してよりセンシティブになってきた。
3. ある場所に居住する人（あるいはその場所に固定資産を有する人）は、より高い移動性を持った資本のために、他の場所との競争関係に置かれていることを鋭く自覚するようになってきた。物理的・社会的インフラストラクチュア、労働の質、社会的・政治的調整、売り物となる文化的・社会的生活（これらのすべては構築に開かれている）、こういったものの特定の組み合わせは、例えば多国籍資本にとっては、多少とも魅力的なものとなりうるのである。居住者はどのようなパッケージが、彼ら自身の欲求や必要を満足させながら、発展をもたらしてくれるのか気をもんでいる。場所はそれゆえ自らを他の場所から差異化し、資本投下を獲得し、また保持するためにより競争的（そして多分お互いに敵対的で排他的）なものとなる。この過程において宣伝とイメージ構築のために動員可能なあらゆる手練を利用した場所の売り込みがたいへん重要なものとなる。「いつの日か私たちはすべてより良い場所に行くだろう」、クロイドンの巨大な広告掲示板はそう告げてミルトン・ケインズへの移転を宣伝している。
4. 超過資本を吸収するための有益なプロジェクトは最近の 20 数年間において見つけることがむずかしく、かなりの割合の余剰分はその用途を投機的な場所の構築に見いだしてきた。叡知を欠いたこうした傾向は、不動産開発への過剰投資によって合衆国の貯蓄貸付機関に多額の債務不履行を招き（5,000 億ドル—第三世界の債務全体よりも大きい—）、また不動産開発への過剰投資によって世界最大手の銀行の多く（日本の銀行を含む）を危うい立場へと導いた。場所の売却とそうした場所の独特の質（退職後あるいは観光用のリゾート、新しいライフスタイルのコミュニティ etc.）の強調はほとんど熱狂的ともいえるものであった。

結果は資本主義的発展に向けての場所間競争の強制力をより強固なものとし、資本主義的規範の外部に位置する場所構築のプロジェクトの余地を減少させることとなった。そこでは良好なビジネス環境を保護し、

投機的開発から利益を得ようとする関心が支配的となる。場所間競争は、しかしながら、単に生産のみをひきつけようとするものではない。それはまた文化的中心や心地よい都市景観・地域景観といったものを創り出すことで消費者をもひきつけようとする。消費スペクタクルへの投資や場所イメージの売り込み、文化資本・象徴資本の定義をめぐる競争、場所と結びついた地方土着な伝統のリバイバルなど、これらのすべてが場所間競争と合成されている。ちなみに次のことを注記しておこう。例えば建築や都市デザインの領域におけるポストモダンの生産物の多くは、かつてないほどに深まった商品文化の一部ないし一区画として場所を売却することとかかわっている。その結果、自らを差異化しようとする場所は、一連の均質な複製を作り出すことに終わってしまうのである（Boyer, 1988）。

ここで次のような疑問がすぐにわきおこる、すなわちなぜ人々はそうした過程によって彼らの場所を構築することに応じてしまうのか。もちろん端的な答えは、彼らはしばしばそうはしない、というものである。場所の構築に関する歴史地理は、社会的に正当な（コミュニティの必要に応えるための）再投資をめぐる闘争の事例、「コミュニティ」の貨幣価値や交換価値とは異なる価値を表わす発展のための闘争の事例、あるいは脱工業化やハイウェイの建設を通じた都市の略奪に対する闘争の事例（ひどいデヴェロッパーの活動による近隣の破壊に対しては上流階級でさえ抵抗を組織する）であふれている。それゆえ、階級闘争は場所の質の不均等な開発を通じていたるところで空間に刻み込まれている、というアンリ・ルフェーブルの主張は全く正しい。もっともそうした抵抗はすべての過程をくい止めてきたわけではないが（ある都市を略奪する選択権が否定されたとき、投機的資本はすみやかに他の行き先を見つけだすものである）。

しかし一方で投機的諸活動と民衆との共犯的関係の事例も数多くある。こうした共犯的関係は場所を構築する資本のプロジェクトに対する支持を強制的にとりつけたり、そうしたプロジェクトへの人々の取り込みによって生じる。プロジェクトへの取り込みは大まかには以下の諸点をめぐって組織される。

1. 投機的活動の大衆的基盤を提供する分散した財産所有権（誰も自分の家の価値が転落するのは望まないものだ）。
2. 拡大から得られると予想される利益（新たな雇用と経済諸活動を街にもたらしてくれる）。
3. 資本家を支持する側の説得の諸技術がもつ力（成長はあなたにとって良いことであると同時に不可欠のものである）。

これらの理由のために労働組織はローカルな成長連合に対抗するどころかしばしば参加しさえする。一方、プロジェクトに対する支持の強制は資本投下や雇用をめぐる場所間競争を通じて発生するか（資本家の要請に応ずるかさもなくば倒産するか。「良好なビジネス環境」を創り出すかさもなくば職を失うか）、あるいはより単純には反対派の声に対する直接の政治的圧迫や抑圧を通じて発生する（世界の多くの都市における建設マフィアの暴力的策略に対するメディアのアクセスを遮断することによって）。

これらの諸傾向は多くの場合、強固で説得力のあるものかもしれない。しかしわれわれの思考やポリティクスを圧倒する場所の購買が単に以上のような諸傾向に帰せられるものであるとは思えない。都市振興や成長マシーンのポリティクスや多様化を通した文化的同質化などの広がりは、多くの人々が場所に根ざしたアイデンティティのための真正な基盤とみなすものを与えることはほとんどないし、人々が特定の場所に関して表明する政治的愛着の強さを説明しうるものでもない。それではわれわれはほかの説明をどこに探し求めることができるだろうか。

ハイデッガーと存在の位置としての場所

「場所は存在の真実の現場 locale である」とハイデッガーは言う。多くの著者——とりわけ現象学的伝統に位置する人々——が多くのものを彼から引き出してきており、彼の議論がどのように展開されているのかを見ることは有用であろう。以下の引用は彼の議論をあるコンテクストのもとに位置づけている。

> 時間と空間におけるあらゆる距離は縮まりつつある…しかしいかなる狂乱的な距離の廃絶も近しさをもたらすものではない。なぜなら近しさとは距離の短さのうちに存在するものではないからである。距離という点でわれわれにもっとも近いものは、フィルムに写された映像やラジオから聞

こえる音によって、われわれからは遠く離れたままでいることがありうる。距離という点ではとほうもなくわれわれから離れているものが、われわれには近しい存在となりうる…すべてのものは均質な距離の中でひとまとめにされてしまう…不安にし、脅かすもの、それは何だろうか。あらゆるものが現前するそのあり方において、すなわち距離の完全なる征服にもかかわらず事物の近しさは不在のままに残るという事実において、それは自らを示し、また自らを隠すのである（Heidegger, 1971, p. 165）。

空間的障壁の除去がもたらす恐怖の感覚に注目してほしい（私が他の所でふれたことのある「時間—空間の圧縮の恐怖」と比較してほしい）。この恐怖は日常生活において避けることのできない存在である。なぜならすべての人間は「事物のただ中での彼らの滞在によって空間を通じて存在し続ける」のであり、それゆえ事物のただ中で変わりゆく空間諸関係によって永遠に脅かされるのである。物理的近さは必ずしもそうしたものに対する理解をもたらさないし、事物を適切に認め、あるいは領有する能力をもたらすものでもない。現代において達成された空間諸関係の変化が商品化と市場交換の産物であることを認識したハイデッガーは、マルクスに近接した議論を展開している。

技術的支配の目的ー性格は、素早く、無慈悲に、そして完全に地球上を覆いつくしてしまう。それはすべての事物を生産過程において生産可能なものとするばかりではない。それはまた生産された生産物を市場を通じて配布するのである。無遠慮な生産において人間の人間性と事物の事物性は市場で算定された市場価値の中に解体されてしまう。そうした市場は全地球を世界市場として測るだけでなく、存在の性質を売買し、そうしてすべての存在者を計算上の取り引き—それは数字など必要としない諸地域においても頑強に支配力をふるう—に従属させてしまうのである（Heidegger, 1971, pp. 114-115）。

ハイデッガーはしかしながらきわめて特異なやり方でこれらの支配に反発しようとする。彼は世界市場からひきあげ、熟考と内省によって人間的実存の真実と意味を明らかにする方途を探ろうとするのである。彼が焦点を当てる概念は「住むこと dwelling」である。彼はそれをシュヴァルツヴァルトの農家の記述を通して説明している。

ここにおいて天と地、神と人間を全き単一性において事物へと立ち入らせる自己充足的な力が家を要求した。この力は泉に近い草地の中でも風のあたらない南向きの山地斜面に農場を位置づける。またそれは雪の重みにも耐えうるほどよい勾配を持ち、長い冬の夜の嵐から部屋を守る前傾した広い屋根板を与えた。コミュニティ・テーブルの背後に祭壇の一角を置くことも忘れなかった；部屋の中に分娩と「死者の木」—彼らが棺（Totenbaum）と呼ぶもの—のための神聖なる場所の余地をも残した。このようにしてその力は一つ屋根のもとで何世代にもわたって時代をつらぬく旅の性格を描き出したのである。それ自体住むことからわき出る技芸は、なおその道具と枠組みを物として用い、農家を建てるのである（Heidegger, 1971, p. 160）。

住むことは人間と事物の精神的合一を達成するキャパシティである。このことから、「われわれに住まうキャパシティがありさえすれば、家を建てることはできる」ということになる。実際、建物は「それらが追い求められ、純粋にそれ自身のために獲得されるとしたら、住むことそれ自体の性質さえをも否定することになるだろう」（Heidegger, 1971, p.156）。単に避難所を建てることで和らげられうるような狭い意味でのホームレスネス（家の喪失）という感覚もあるが、より深いホームレスネスの危機が近代世界には見出される。多くの人々が自らのルーツを失い、故郷へのつながりを失ってしまったのである。物理的な意味で場所に滞在する人々でさえ、近代のコミュニケーション手段（ラジオやテレビなど）の侵入によってホームレス（根なし）になってしまうかもしれない。「人間の『根を持つこと』や『土着性』は今やその核心において脅かされているのである」。もしわれわれが住まうキャパシティを失ってしまったならば、われわれは自らのルーツをも失い、あらゆる精神的滋養の源から切り離されてしまうだろう。実存の不毛化は計り知れないものとなる。真正な芸術作品の隆盛は土着の土壌へ根ざすことに依存すると、ハイデッガーは主張する（Heidegger, 1966, pp. 47-48）。「われわれは——それを自らに認めるにしろ認めないにしろ——大気の中で花咲き、果実を結ぶために根っこ（ルーツ）を持って大地から生まれでるべき植物である」。そうしたルーツが剥奪されたならば、芸術はかつての自己の無意味な戯画におとしめられてしまう。問題は、それゆえ、意味深いルーツが確立されうる存続可能な故郷を回復することである。場所の構築はルーツの回復、すなわち住むことの技芸の回復をめぐるものとなるのだ。

ハイデッガーの「存在論的発掘」は場所構築の社会

過程を理解するための特定のアプローチを示唆している。彼は、場所が「度重なる出会いと複合的な連想を通じてわれわれの記憶と情感の中で構築されていく」（Relph, 1989, p. 26）あり方に、われわれの注意を向けさせる。そしていかに「場所の経験が必然的に時間に深く刻み込まれ、記憶によって資質を付与されたものである」のかを強調する。「場所と大地に対する愛は、すべての技術的・物質的諸問題が解決した後に初めて楽しまれるべき類の感傷的な付属品などではない。それらは世界内存在の一部であり、それゆえあらゆる技術的問題に先立つものである」（Relph, 1989, pp. 27-29）ように、彼は「われわれ人間の本性と環境について語り、また心をくばる新たな様式」を提供したと言われたのである。しかしいくつかの難点もある。多くの偉大な哲学者と同様にハイデッガーもその定義において非凡なる曖昧さを残しており、彼についての批評家たちはこれらの曖昧さが意味しているものが何かを掘り下げるべく日夜努力を続けたのである。例えば「住むこと」の諸条件は、高度に産業化されたモダニズムの資本主義世界においてはいかなるものだろうか。われわれはもはやシュヴァルツヴァルトの農家に引き返すことはできないということを彼ははっきりと認識していたが、それならばわれわれが向かうべきところはどこなのだろうか。例えば、場所の経験の真正性（根付いていること）という問題は難しい問題である。まず第一に、ドヴィーが述べるように、真正性という問題はそれ自体、特殊近代的な問題である（Dovey, 1989, p.43）。近代の工業化がわれわれを生産過程から切り離し、われわれが最終商品としてあらわれる環境に遭遇する時にだけ、真正性という問題が立ちあらわれるのである。場所に根付くことは、場所の感覚を有することや、それを深めることとは異なる種類の経験であるとトゥアンは主張する—「真に根付いた共同体は聖堂やモニュメントを持つかもしれないが、しかし過去を保存するための博物館や団体を擁するようなことはしない」（Tuan, 1977, p. 198）。場所と過去の感覚を呼び起こす努力は、今やしばしば計画的かつ意識的なものとなっている。しかしここにこそ危険がひそんでいる。真正性と近代的価値の探究は、つくられた真正性や発明された伝統、商業化された先祖伝来の文化といったものを市場が供給することによって次第に失われていっている。近代性の最終的な勝利は、マッカネルが示唆するように、非－近代世界の消失ではなく、その人工的保存と再構築なのである（MacCannell, 1976, p. 8）。

それにもかかわらず、住むことと根付くことの真正性が、技術と合理主義と大量生産と大衆的価値の近代的拡大によって破壊され続けているというハイデッガーの主張は広く受け入れられているように思える。レルフ（Relph, 1976）は、深部にいたる市場の浸透とその容赦ない組織的権力によって場所は破壊され、「非－真正」な、あるいは「非－場所」的なものとされてしまっていると言う。それへの対応は場所のポリティクスを構築するというものであり、それは真正な実存のための約束の地を目指す政治的方途とされる。例えば左翼系雑誌の『ネーション』（1990 年 10 月 22 日）においてカークパトリック・セールは次のように書いている。「救済の希望を提供する唯一の政治的展望は、場所に根をおろし、どっぷりと身を委ねることに対する理解に基づくものである」。

このことは最初の問題に対する第二の切り口を可能としてくれる。空間的変容と場所構築の政治－経済的諸過程によって住むことの真正性がその基盤を堀り崩されるほどに、場所はますます重要なものとなってくる。ハイデッガーが提供し、そして彼に続く多くの人々が彼から引き出したものは、そうした素朴な資本主義的（あるいはモダニズム的）論理に対するある種の抵抗や拒否の可能性にほかならない。ここから、技術的合理性や商品化、市場価値、資本蓄積といったものの社会生活（あるいはハバーマスを含む多くの人々が「生活世界」と呼ぶもの）への浸透の増大は、時間－空間的圧縮をともないながら、（語のもっとも広い意味において理解される）場所のオルタナティブな構築を目指す抵抗をますます引き起こしていくことになるだろう。多くのラディカル運動やエコロジカル運動においてコミュニティの真正な意味や自然への真正な関係を求める動きは、まさにそうした感性の鋭利な刃物なのである。レイモンド・ウィリアムスのような痛烈な社会主義批評家でさえ、場所を「単なる出来事の場以上のものであり…しばしば廃棄される歴史が物質化したもの」（Williams, 1979a, p. 276）ととらえ、またウェールズ辺境地帯に関する一連の小説を、同地の政治的・情感的意味を探究すべく書いたのである。このようにハイデッガー派の議論には、たとえハイデッガー

その人のマニフェストにおいてそれを拒否する強力な基盤があったとしても（私はそれを示したいのだが）、確かに注意深い考察に値するだけの信憑性がある。

差異の解決に向けて

マルクス主義とハイデッガー的伝統との違いは、モダニズムとポストモダニズムの思考様式や感覚の間の予想される対立に光を当てることになる。マルクスにとって複雑な社会諸関係と普遍的な性質を備えた貨幣と商品生産の世界の分析は、疎外と搾取によって特徴づけられながらもグローバルな政治－経済的戦略によって救済されねばならない道徳的・経済的・政治的責任の普遍的な局面を定義するものである。このことはあたかも市場の物神性の枠組みの中に横たわる日常的経験世界がもはや無意味であるということを含意するものではない。こうした経験は、それこそがありうるすべてであるとわれわれに永久に思わせるほど真正なものとなり、その枠内におけるわれわれの存在や道徳的責任、政治参加に対するわれわれの感覚を基礎づけるものであるということが、まさにマルクスの言わんとした点なのである。マルクスはそうした枠組みを超えて、その初期の著作で述べているように、全地球的な規模で他者との自由な連帯（アソシエーション）を築くことによってのみ諸個人がその完全なる個性を実現するようなポリティクスによって「類的存在」を構築しようと試みたのである（Marx, 1964）。こうしたレトリックは悪名高き曖昧さと不確かさを有するものではある。しかしそれが意味するところはわれわれがもはや後戻りできないということであり、すべての諸国民をグローバルな経済の中に相互に結びつけることによって達成されてきた社会性の世界を拒否することはできないということであり、われわれはこの到達点のうえに何物かを打ち立てねばならず、またそれを疎外なき経験へと改変していかねばならないということである。資本主義的発展の論理によって構築された場所のネットワークは、拒否されたり破壊されねばならないのではなく、改変され、そして前進的な目的のために利用されねばならないのである。

モダニズム的推進力のより前進的な側面はこうした考えから多くのものを引き出している（もっとも場所の変容への関心はマルクス主義の革命的伝統の中で奇妙にもかき消されてきたのであるが）。しかしながらモダニズムが疎外に挑むこともなく貨幣や商品、資本、交換の普遍主義と共犯的な関係にあったことを理解するのも、またむずかしいことではない。それは世界に対する法人官僚的な見方や国家資本主義的な見方に取り入り、また疎外に対するいかなる対応をも抑制するような共通言語を（例えばヒルトンホテルチェーンの建設に見られるように）押しつけてきたのである。また特定の場所における日常生活の直接的な経験世界を捨象した国際主義的な労働者階級のポリティクスも同様にその価値と信頼性を失ってしまいかねない。

一方、ハイデッガーはいかなる意味においても直接的な感覚的、内省的な経験の世界を越えた道徳的責任というものを全面的に拒否する。彼は国際的分業により形成される商品および貨幣、技術、生産の世界といかなる関係を持つことをも拒否する。彼は事物の経験の生得的かつ内在的な質について問うために、自らの視野をきわめて狭い経験世界に限定する。彼は住むという経験と場所および環境の種別性の還元不可能性を主張する。そうして彼は、近代的生活における共同体の喪失やルーツの喪失、そして住むことの喪失という感覚を呼び起こすのであり、それは明らかに多くの人々の琴線に強くうったえかけたのである。

> もし場所が世界における人間の実存の根本的な局面であるならば、そして諸個人と諸集団の安全とアイデンティティの源泉であるならば、意義深い場所を経験し、創造し、維持するための手段が失われていないということは重要なことである（Relph, 1976, p. 96）。

問題はそうした感情が、熱烈なナショナリストではないにしても排他的で偏狭で共同体主義的な解釈とポリティクスへと人々を容易に向かわせることである（ナチズムへのハイデッガーの関心）。ハイデッガーは他者（事物および人々）との（市場や他の媒体による）媒介された社会諸関係を、いかなる意味においても真正さを表すものとしてとらえることを拒否する。実際、この種の媒介された諸関係はアイデンティティと真実の自己の意味を脅かすものと理解される一方で、ルーツの喪失に貢献するものや、その傾向があるものは何であれ徹底的に拒絶されるのである（このことがルーツを失い流浪するユダヤ人に対するハイデッガーの敵意を説明するのだろうか）。さらに真正な芸術や純粋

な審美的感覚は場所へしっかりと根をおろすことによってのみわき出てくるものであるがゆえに、経験はある境界線を越えると共約不可能なものとなる。こうした排他的な見方は社会生活に対する言語の権力に関するハイデッガーの見解においてますます強調されたものとなる。場所は共約不可能な他者性の場となるのである。モダニズムがしばしば求めたような伝達可能な意味の世界や審美性の世界では、たとえ生産と交換の物質的世界の強力な相互連関のコンテクストにおいても、もはや何の相互のつながりもあり得ないのである。

こうした観点からみれば、ポストモダンの思想においてしばしばハイデッガーが「解釈学的共同体」や断片化された言語ゲームその他の創造に関する諸観念の先駆者としてあらわれるのを理解することは困難ではない。またポストモダニズムの商業的側面がこれらの感情を利用し、地方土着なものを市場で取引し、真正なるものを鼓舞し、そして遺産と伝統と商業化されたルーツさえをも発明することを理解するのも困難なことではない。それにもかかわらず、奇妙にもマルクスとのさらなる共通点が存在している。ハイデッガーは真正な共同体を、ポストモダンのレトリックや言説の諸領域においてしばしばみられるような、それ単独で構成されるものとしてではなく、住むことを通じて特定の場所に物質的・物理的に根をおくものと見る点で一貫している。

しかしもし私が正しいならば、そして（現在一般的に解釈されるような）モダニズムとポストモダニズムがモダニティの長い歴史の中で弁証法的に統一される対立であるとするならば（Harvey, 1989, p. 339）、これらの議論は相互に排他的なものとしてではなく他者を含む対立として考えることから始めるべきであろう。マルクスは経験を、物神性の枠内において十分に真正ではあるが、しかし皮相的で誤解を導くものとみなしている。一方ハイデッガーはその同じ商品交換と技術的合理性の世界を、拒否されるべき日常生活の非真正性の根源とみなしている。問題の根源に対するこのような認識の共通性は――マルクスによって資本主義として、ハイデッガーにより近代主義（資本主義と社会主義の双方）としてそれぞれ特定されはしたが――場所のよりよい理解を再構築するための共通の基盤を提供してくれる。それではわれわれが差異を調停不可能な矛盾としてではなく、モダニティとポストモダニティの双方の条件に固有の弁証法的対立として見るとき何が起こるのだろうか。

単純に答えてしまえば、われわれはある普遍的な緊張の世界に生きている。それは場所における感覚的な個人間の接触（その中でつかの間の経験が展開するような場所の質についての強烈な意識をともなう）と、例えばテーブルに今朝の朝食を用意する直接的・間接的な役割を果たした他の多数の人々とわれわれとの間に存在する物質的つながりと義務について多少とも認識するような意識の次元との間の緊張からなる世界である。もっと形式的にいえば、さまざまの場所でそれぞれ生じる事柄から独立して空間諸関係を理解することはできないし、またある場所で生じている事柄をその場所を支える空間諸関係を離れて理解することはできない、ということである。このことは陳腐な取るに足らない真実のように聞こえるかもしれないが、その概念の様式は政治的な思考と実践への主要な分枝を備えているのである。

例えばヤングによる最近のエッセイ（Young, 1990）について考えてみよう。彼女は共同体の観念に焦点を当ててきたフェミニズムのいくつかの支配的な論調に対する批判から始めている。「言説における統一と全体性への欲望は、境界と二分法と排除を生み出してきた」と彼女は不満を述べる。さらにまた政治理論においては、共同体の概念は「時間と空間の遠隔化distancingの否定を含意し」、「多元的なコンテクストにおけるメンバー間のフェイス・トゥ・フェイスの相互作用」の強調を含意している。しかしながら「フェイス・トゥ・フェイスの諸関係は時間と距離を横断して成立する諸関係よりも純粋であり、真正な社会諸関係であると考える概念的な基盤は存在しない」。このことは重要な問題である。なぜなら「近代社会において疎外と支配を生み出す主たる構造は官僚制と商品化である」というのは真実かもしれないが、それはすべての媒介された諸関係が疎外的であるということを意味するものではないからである。「直接的なフェイス・トゥ・フェイスの諸関係からなる社会を理想的なものと措定することで、共同体論者たちは将来の『真正な』社会と、私たちがそこで暮らしている疎外と官僚主義化と退廃によってのみ特徴づけられる『非真正な』社会との二分法を生み出だしてきたのである」。ハイデッガー的伝統に対する彼女の批判は辛辣である。「人種主

義や民族的な狂信的愛国主義、階級的さげすみ…といったものは共同体への欲望、すなわち彼らが自分たちを理解するように他者を理解したいという欲望、私が自分自身を理解するように理解されたいという欲望から、部分的には生じたものである」。今日の合衆国において「ある集団の積極的なアイデンティティの形成は、しばしば最初に他の集団を他者として、すなわちさげすまれるべき半人間 semihuman として定義することによって達成されるのである」と彼女は主張する。

これに対するヤングの解決法は、フェイス・トゥ・フェイスの共同体という理想を「非抑圧的都市 unoppressive city」の理想と置き換えることにあった。あらゆる差異が時間と空間において媒介された諸関係の中で具体化され、取り決められ、許容される、という都市生活の能動的経験のうえに、この非抑圧的都市は構築される。「非抑圧的都市」とは「同化されることのない他者への解放」として定義されるものである。こうした解決は都市経験の現実的ダイナミクスに関してどちらかというとナイーブに示されたものであるが、それが指し示す方向——支配的な統一の中での差異と多様性の称揚——は興味深いものである。それは新たなラディカル・ポリティクスの中でのマルクス的諸概念とハイデッガー的諸概念の橋渡しの可能性を想定しているのである。しかしながらもう一つの考察されるべき重要な問題がある。ヤングはサンデルを引用する。

> われわれの本質的な自己了解が個人のみならず、家族や部族、都市、階級、民族、国民などいずれであれ広範な主体を包含する限り、それらは構成的な意味において共同体を定義するのである。そしてそうした共同体を作り出すものは、単に慈悲深い博愛の精神や共同体的価値の普及や「共有された最終目的」であるのではなく、その中で人間の不透明さがたとえ最終的に解消されるのではないにしても、縮減されるような暗黙の実践と理解のバックグラウンドと共通の言説ボキャブラリーなのである（Sandel, 1982, pp. 172-173）。

ポストモダニズムの思想の主要な関心の一つは社会秩序におけるアイデンティティと「場所」の言説的構成であり、その様式は偶然的に一致する場合を除いて物理的立地や領域的表現とはほとんどあるいは全く関係を持たない。このことは、一方で共同体と場所が表象され想像される様式と、他方でそれらが物質的な社会的諸実践を通して実際に構成される様式との間に厳然とした亀裂が挿入されただけでも、議論を複雑なものとしてしまう。しかしながら想像力と言語の役割を主張することは、アンダーソンが指摘するように（Anderson, 1983）、共同体と場所は言説の領域において「それらの偽物/本物という違いによってではなく、それらが想像されるスタイルによって[のみ]」区別されうるということを証明する重大な効力を有している。この結論は「真正な」あるいは「非真正な」共同体および場所という安易に定義される区分を行う考え方とは根本的に相いれないものである。もしマルクス（Marx, 1967, pp. 177-178）の言うことが正しく、常に想像力と表象が生産に先立つとすれば、ハイデッガーの見解は物質的具体化を待ち受けている一つのありうべき想像された場所となるだろう。ハイデッガーははるかな過去を呼び出し、原初の言語の見かけ上連綿と続く永続性にうったえたかもしれない。しかし彼はまたシュヴァルツヴァルトの農園世界に後戻りすることはもはや不可能であることや、その時代と場所にふさわしい新たなる「真正な」共同体を、国家社会主義が約束したようなやり方で構築するためにも前進することが必要であるということを認識していた。

しかし逆説的に、想像の真正な共同体の探究を実践的な主張たらしめるものは、ハイデッガーが対抗しようとした諸条件なのである。資本主義の長きにわたる歴史地理がわれわれを空間的制約から解放したおかげで、われわれは既存の場所から独立して共同体を想像できたのであり、また以前には不可能であったやり方でそうした共同体を収容するための新たな場所を構築する試みに着手できたのである。トマス・モアとフランシス・ベーコン以降、今日にいたるまでのユートピア的思想の歴史はそうした点を例証している：ウェルウィン田園都市からチャンディガル、ブラジリア、あるいは日本人のプランによるオーストラリアの名だたる多機能都市 Multifunctionpolis にいたる新たな都市を構築し発展させようとする傾向は、現実の場所の構築を通じてユートピア的諸観念を物質化しようとする試みを証明するものである。しかしながら、そうした変容の実践と、場所への愛着が生み出しうる親密さや安全性、そして深い帰属感覚とを一致させることは困難である。

空間的諸実践を通じた場所の構築

場所の構築とその経験的な質にともなう物質的諸実践と諸経験は、場所が表象され想像される様式と弁証法的に相互関連しているにちがいない。このことは私が『*The Condition of Postmodernity*』で描出した「ルフェーブルのマトリックス」（Harvey, 1989, pp. 220-221）へと私を引き戻す。それは、場所はいかにして物質的人工物として構築され経験されるのか、それらはどのように言説に表象されるのか、そして現代の文化において表象として、すなわち「象徴的場所」としてそれらはどのように用いられているのか（Lefebvre, 1991）、という問題を考える一つの方法である。場所の構築における経験と知覚と想像力との間の弁証法的相互作用がそこでは焦点となる。しかしまたわれわれは、場所について、その遠隔化（現前／不在と空間的スケール）や領有、支配および生産の間の諸関係をも同時に横断し考察する必要がある。これらのことは、上記のマトリックスが階級やジェンダー、共同体、エスニシティ、人種などの社会諸関係が作用する枠組みを提供するものでしかないという事実と結びつけられるとき、気勢をそがれるものとうつるかもしれない。しかしこのことは私には、場所構築の社会諸過程が有する豊かな複雑性に一貫したやり方で取り組みながら、一方でマルクスとハイデッガーの各々のアプローチに示された両者の関心をつなぐ架橋を見つける唯一の方法であるように思われる。以下、それを説明してみよう。

ニューヨーク市のタイムズ・スクエアは 1890 年代に新しい娯楽地区を作り出す中で、純粋な不動産投機とビジネス投機によってつくりあげられた一区画である。1900 年代の初頭、その名前はタイムズ・スクエアに移転してきたばかりのニューヨーク・タイムズ紙によって売り込まれた（その最大のライバルであるニューヨーク・ヘラルド紙はさらに下町のヘラルド・スクエアに立地した）。タイムズ紙はプロモーションの策略として大晦日の夜の祝賀花火や、ついにはあの球を下げる祝賀式を大々的に組織するなどした。多数の人々が当日だけでなく年間を通じて催し物を経験し、人々を見物し、食事をし、最新のファッションを物色し、ビジネスや不動産の取り引きから最新の娯楽トレンドや有名人の私生活にいたるあらゆる物事に関するゴシップや情報を集めるためにタイムズ・スクエアを訪れた。間もなくそこはそれ自体で大衆を引き寄せる広告スペクタクルの中心となった。つまりタイムズ・スクエアは場所構築の政治経済学において、商業的でけばけばしく、宣伝向けの投機的なものすべての表象として創り出されたのである。それはシュヴァルツヴァルトのあの真正な住まいとは大きく隔たっていたし、少なくとも表面上、せいぜい「代用品」として、あるいは文芸批評家たちが好んで呼ぶ「疑似－場所 pseudo-place」とみなされるべきものかもしれない。しかしそこは間もなくニューヨーク市の象徴的中心となり、1950 年代以降に衰退する（大きくはテレビの影響による）まで多くのニューヨーク市民にとっての連帯と共同体の中心となった。タイムズ・スクエアは人々が祝福し、嘆き悲しみ、あるいは彼らの集合的怒りや喜び、恐れを表現するために集まるような二つとない場所となったのである。政治経済の様式によって生み出され、支配されるその場所は、全く異なる流儀で大衆によって領有された。それはたとえ物質的な社会的諸実践の空間として純粋に投機的な商品化されたスペクタクルという特性を持つとしても、特有の想像力を持った真正な表象の場所となったのである。こうしたことはいかにして起こり得たのであろうか。

5 つの区からなる近代のニューヨーク大都市圏とスプロール化する郊外が形成されるのにともない、タイムズ・スクエアは目立つ場所となってきた。その台頭は不動産投機の異常なブームや、都市における人々の空間関係の性質を全く変えてしまった大量輸送システムの登場（1901 年に地下鉄がタイムズ・スクエアまでのびた）と符合するものであり、また国際的・全国的なコミュニケーション（とりわけラジオ）や情報および貨幣フロー、および大量消費商品としてのファッションと娯楽の商業主義とマーケティングといった新たなシステムの成熟と符合するものであった。これはカーン（Kern, 1983）が記録するように、急速な「時間－空間的圧縮」の一局面であり、多くのニューヨーク市民たちまでもが彼らのアイデンティティ感覚を失ってしまうようなものであった。都市の急速な成長がもたらすストレスはニューヨーク市民たちを「奔走させ」続け、時には急速な変化の中での永続性やある意味では安全性を与えてきた近隣の諸制度や弱い立場の移民の基盤を掘り崩していった。タイムズ・スクエアがその平穏な時代に特徴的だったことは、そこはあらゆる階級の人々が混ざり合うことのできる無階級

classless（あるいはむしろ多階級 multiclass）の場所であったということである。そこは差異を認めながらもまたまとまりを称揚する共同体的な感覚の中心となりうる潜在的可能性を持った場所であった。そこでは売春婦の世界が上流階級社会と肩を触れ合い、あらゆる種類の移民がスペクタクルを共有し、貨幣の民主主義が主役としてあらわれてくる。しかしこの場合における共同体はフェイス・トゥ・フェイスの相互作用によって形作られたものではない。それはスペクタクル――貨幣共同体と万物の商品化をめぐる恥ずかしげもないスペクタクル――に直面した共同存在の行為によって達成されるものであった。ニューヨークのタイムズ・スクエアは確かに貨幣共同体を表象するものであった。しかしそれはまた、集合的記憶におけるタイムズ・スクエアの独特の象徴的意味と場所のためにこの特別の公共空間をつくりかえ再開発する計画に反対しようとする多くのニューヨーク市民の精神と帰属感情にとっては、全く異なる共同体の観念を表象するものともなった。

これと同じような物語は全く正反対の向きからも語ることができる。真正な共同体の探究、とりわけ資本家や実利主義者や高度に貨幣化された文化において典型的に見いだされるものとは無縁な諸価値を表わすような共同体のかたちの探求は、オルタナティブな視点にしたがってしばしば共同体と場所構築の直接的な試みを導いてきた。しかしそれらの試みのうち生き残ってきたもの（たいへん少ない割合であるが）はすべて例外なく権力と貨幣、商品化と資本蓄積、そして近代技術に適応することによってそれを可能としてきた。それらはまた変わりゆく空間的諸関係へと自らを繰り返し織り込んでゆくキャパシティを示してきた。このことはイランにおけるイスラム原理主義革命の激動や（それは現在、それほどあからさまにサタンに迎合することなくいかにして世界資本主義経済にみずからを織り込んでいくのかという綱渡りをおこなっている）、資本主義からみずからを切り離そうとした数え切れないほどの共同体運動――それらは合衆国に移住したフランス・イカリア派の人々のように、多くの場合さらなる資本主義的発展の力となった（Johnson, 1974 を参照）――その起源を 19 世紀前半のニューヨーク州西部に持つ地方自治主義と町建設の異常な高まり（モルモン教徒やシェーカー教徒、初期のフェミニストを含む）、パタゴニアやシベリアのような縁辺にも分散した集落を生み落とし、またゲデスやエベネザー・ハワードのニュータウン運動にも影響を与えたアナーキズムやサンディカリズムの運動などについても同様にあてはまる。場所を建設するこれらすべての物語は、文化的ポリティクスが利潤や投機的利益に対する単純な欲望を有するのと同様に、しばしば場所構築のインスピレーションの根っことなってきたことを示唆している。さらにこれら二つの絡み合いはどこにでも遍在するのであり、ある場合には文化的ポリティクスそれ自体が目的であるよりも、政治－経済的目的の手段となるものでもある。

『丘の上の都市』でフィッツジェラルドは合衆国のコンテクストにおいてこれら二つが絡み合う交点の姿を正確に描き出している。ゲイのコミュニティによるサンフランシスコ・カストロ地区の領有とその後の支配、ジェリー・ファルウェルによるリンチバーグの宗教的帝国、そしてサンシティ（フコリダにある退職者のコミュニティ）、これらに関する研究はすべて資本蓄積の文化的ポリティクスを様々に異なる様式において説明している。しかしながらフィッツジェラルドの研究の中でももっとも風変わりなものがラジニーシュプラム Rajneeshpuram についてのものである。オレゴンの人口希薄な半乾燥地帯の牧場で 1981 年にバグワン・シュリ・ラジニーシュ Bhagwan Shree Rajneesh の弟子たちにより「自給自足」のコミューンが結成された。それはライフスタイルの観点からみて新世代共同体のあらゆる装いを備えていたが、しかしまた積極的な貨幣使用と高度技術、そしてラジニーシュが数年間にわたって育て上げてきた弟子たちのネットワークのうえに築かれた世界規模の国際性によっても特徴づけられるものであった。牧場には 150 万ドルを費やし、さらにフィッツジェラルドの計算によればラジニーシュは 2 年間のうちにオレゴンで 6,000 万ポンド以上の金を使い、すべての新しい集落を建設し、滑走路や巨大な貯蔵所、発電所、灌漑農地、3,000 人以上の人々を常に収容し、さらに数千人以上もの人々の一時的な住まいを提供することのできる住宅とさまざまな諸施設が建設された。ラジニーシュはガンディーとマザー・テレサを貧しい人々への関心のゆえに見下していた。貨幣こそが豊かな生活の手段となったのである。「宗教は富めるものの贅沢である」と彼は主張し、そ

れを証明するために 21 台のロールスロイスを所有していた。コミューンは居住者に対して一日少なくとも 12 時間のきつい仕事を求め、一方で幾人かの高学歴者や技術的才能をもった人々を引き抜いて、明らかに非階層的な社会関係の雰囲気や、個人的成長への人間の潜在的可能性が現実化されるような場所の創造をいかにも楽しんでいるような雰囲気の中で仕事に従事させた。しかしコミューンの排他的なポリティクスは、みずからを内部的には精神的・物質的退廃の海に浮かぶ島とあらわし、外部的にはアメリカ農村部の核心に挿入されたガンにおかされた異物とあらわされるようになるほど強力なものであった。コミューンの解散とラジニーシュの国外追放、そしてわずか数年のうちに個人的解放と人間的成長のメッカから軍事キャンプへとコミューンを転換した幾人かの指導者（彼らは様々な役人の毒殺や近隣の共同体の水道供給へのサルモネラ菌の混入という暴力的行為にたずさわっていた）の逮捕は、フィッツジェラルドによれば、そのコミューンを体験した多くの人々の強い情愛の気持ちを減じることにはほとんどつながらなかった。むしろコミューンは一時的にではあれ人々に家を与え、人々が感謝を覚えるような個人的な体験の領域を与えたのである。それはニーズに応え、欲望を満たし、忘れ得ぬようなやり方でファンタジーを生き抜くことを可能としたのである。しかしそうしたコミューンはまた内的差異に対するあらゆる不寛容と陰険なヒエラルヒーを露呈し、ヤングが正しくも恐れた排他的なポリティクスが共同体主義のポリティクスの必然的な最終結果であることをも示したのである。その短い成功の期間に、コミューンは道徳的熱情と組織による導師へのロールスロイスの提供によって維持される低賃金労働奉仕キャンプのあらゆる属性を備えていた。場所の真正性を生み出そうと渇望する文化的ポリティクスが、金銭的利益に組み入れられ、そのために用いられたのは、これが最初でもなければ最後でもなかった。

このことの教訓はきわめて単純である。現代世界において差異を確立させようとする人々は誰でも、必然的に貨幣の媒介権力を必要とする社会的諸実践によらなければならないということである。貨幣の媒介権力は、結局のところ、個々の人間によって領有されうる世界的・普遍的な社会権力なのであり（それゆえそれはブルジョア個人主義の基礎を与える）、明確なアイデンティティをでっちあげようとするいかなる「解釈学的」ないし「政治的」共同体もそれに適応しなければならないのである。実際、多くの事例において（フィッツジェラルドが調査したすべての事例において）、十分な貨幣権力の所有は場所構築を通じた差異の探求にとっての必要条件となっている。「宗教は富める者の贅沢である」というラジニーシュのコメントは、この意味においてはむしろ慰めに近いものである。つまりあらゆる類の他者性に独立した実存を獲得させ、生き残ることを可能とさせるものは、貨幣権力の普遍性と社会性なのである。そのこと自体は何ら悪いことではないが（もしわれわれが資源を持っているならば、われわれはジェンクスやリオタールが示唆するように折衷主義になるであろう）、しかしそれは現代世界における差異および他者性の生産と政治－経済的権力の組織化および配分との関係について考察することをわれわれに強いるのである。上記の事例は文化的ポリティクス一般（とりわけ情感的共同体の模索）と政治－経済的権力が場所構築の社会諸過程において相互に絡み合う様子を示している。一方を省みることなく他方を検討しようとすることはもはや認められない、と結論づけられるかもしれない。

場所と権力

あたかも場所（ロカリティ、地域、近隣、国家、等々）が原因となる力を有するものであるかのように「場所の権力」について語ることは、もしわれわれがみずからを厳密に、場所が社会過程であるという定義に限定しないのであれば、悪しき物神性に与することである。後者の（社会過程としての場所という定義に限定する）場合、提起されるべき問題は明白なものとなりうる。なぜ、そしてどのようにして、社会的存在は場所（ロカリティ、地域、国家、共同体、その他何でも）に社会的権力を与えるのか。どのようにして、何のために、そうした権力は相互に結びつけられた場所の高度に差異化されたシステムを横断して展開され、利用されるのか。

権力の差異化の生産と再生産は、いかなる資本主義経済の作用にとっても中心的な問題である。労働者階級（あたかも油や木材によって多少とも代替可能な「人的資源」として物象化される）と資本家階級の間に巨

大な分水嶺があるだけでなく、より多様で微妙に差異付けされた分割もまた存在する。それらはブルジョアジーを分派させる分割（金融、土地、生産、商取引、行政、法律、科学、軍隊および警察権力における様々な利害、関心）と同様に、微細な社会的・領域的分業（例えば生産ライン上の労働者と監督、経営者、サービス業労働者、デザイナーなど）の中に必然的にあらわれてくる分割である。資本主義的秩序に先立つ差異——ジェンダー、人種、言語、エスニシティ、宗教および前資本主義的な社会階級——は、自然の支配と賃労働の管理を通じて資本蓄積が保証されるような社会システムの中に吸収され、変容させられ、再構成されてきた。そうした再構成の様式は詳細な検討に値する。アンダーソンが呼んだ「印刷資本主義 print capitalism」の台頭と、言語的多様性が現代の国家を基礎づける「想像の共同体」へと転形してゆくこととの結びつきはまさにそうしたケースの一つである。同様に人類のある一部分（女性や「原住民」）を自然の一部として描いたり、情感性の貯蔵庫として描いたり、あるいは必然的に混沌として制御不能なものとして描いたりするブルジョア的戦略は、こうした人類の一部分を、自然に対し合理的で秩序ある支配と搾取を行う資本主義的プロジェクトに包摂することを可能としたのである。その結果はジェンダーや人種による抑圧を、従来には経験することのなかった形態へと変容させることとなった。資本主義の革命的なダイナミクスは、たとえ抑圧された人々の明白な闘争や、権力を剥奪された社会諸集団による場所構築のポリティクスへの積極的な取り組み（例えば脱植民地化の長い歴史や、女性によるオルタナティブな生活および労働空間の構築の試み (Hayden, 1981 を見よ)）を欠いていたとしても、そうした変容が一度限りの出来事ではなく資本主義的発展の歴史地理において持続的でしばしば矛盾する運動であることを保証するのである。

社会秩序のあらゆる領域において場所の生産の変わりゆく意味を解釈しなければならないのは、このようなコンテクストにおいてなのである。そしてもし私がルフェーブルのマトリックスにもう一度立ち返るとするならば、それはルフェーブルのマトリックスがこうした過程の複雑性をすみやかに認識することを可能としてくれるからである。なぜならわれわれは、単に場所がその物質的性質（例えば資本家的利用に開かれた生産諸力の集合体や、特定の生活様式と生活の質を維持するのに有効な使用価値の束）を獲得する様式を理解すればよいのではないからである。例えば場所の評価と階層的なランク付けは大まかには表象の諸活動を通じて生じてくる。場所に対するわれわれの理解は、世界についてのあらゆる種類の個人的・集合的な希望や恐怖を備えたある種のメンタルマップの形成を通じて整理されていくのである。鉄道線路沿いやドヤ街の悪しき側面とマイアミ・ビーチの黄金海岸とがわれわれの心の中で並べられることは滅多にない。精神分析の理論は、表象の場は必ずしもそれがそう見えるもののすべてではないことを、すなわち場所にはあらゆる種類の（誤）表象が存在するということを教えてくれる。もし諸個人のアイデンティティが空想によって構成されるとしたら、そのとき人類が場所に与えるアイデンティティははるか後方に位置づけられるものとなるのだろうか。

空想、欲望、恐怖そして切望が実際の行動に表現される限り、空間の表象は物質的な結果を有する。例えば場所についての評価図式はあらゆる種類の政策決定者にとって利益の種となる。都市におけるいくつかの場所は抵当金融の融資対象外とされてしまう red-lined。そしてそうした場所に住む人々は市役所によって価値のない人々とみなされてしまうのである。同様にしてアフリカの多くの人々が無効の人々 basket-case として描かれている。そこでは場所構築の物質的な諸活動は衰退と遺棄の予言を実現するのかもしれない。同様に、都市におけるいくつかの場所は「いかがわしい」とか「危険だ」と称され、再び空想を現実へとかえる公的・私的な行動パターンへと導くのである。つまり、場所（再）構築の政治－経済的可能性は場所表象の評価様式によって強く彩られているのである。

表象をめぐる闘争は、結果として、レンガやモルタルのように場所構築の諸活動にとって基本的なものであると同時に、それをめぐって熾烈にたたかわれるものである（例えば 1920 年代のロンドンのポプラー地区の定義をめぐるイデオロギーの衝突に関する Rose, 1990 の議論を見よ）。そしてここには肯定的なものと同様に否定的なものも多く存在する。他者の場所に対する誹謗中傷は、自分自身の場所の存立可能性とその権力の始まりを主張する方法を提供するものである。場所をめぐるあるイメージとその対抗イメージとの熾

烈な対抗関係は、場所の文化的ポリティクス、場所発展の政治経済学、そして場所における社会的権力の蓄積がしばしば見分けのつかないやり方で融合するようなある闘いの場を形成している。

同様に象徴的な場所の創出は、天空の彼方で与えられるのではない。それは、場所が想像力に対する支配力を有するがゆえに、苦心して育まれ、そして争われるものなのである。世俗社会の主要な制度としての宗教に対する社会的保護が、象徴的場所の創出と保護と育成の成功を通して勝ち取られてきたものであると主張することは正しいと思われる。しかし想像力は特定の政治－経済的目的のために容易に操作され、飼い慣らされるものではない。人々は、自分自身の経験と伝統に関連させるようなやり方でモニュメントを定義することができるし、またそうするのである。殉難者がそこで倒れたような場所（例えば有名なペール＝ラシェーズ墓地のパリ・コミューン兵士の壁）は労働者階級の想像力を長い間つかんできた。しかしいかなる公式モニュメントの建設（例えばチャウシェスクがブカレストに建設した異常に壮大な宮殿）も憎悪された独裁者を皆に愛させるようなことはできないのである。

しかしながらルフェーブル的な構図の強さは、まさにそれが物質性と表象と想像力を切り離された世界として理解することを拒否し、単一範域の他の範域に対するあらゆる特権化を否定したことであり、一方で同時にあらゆる諸活動の究極の意義が記されるのは唯一日常生活の社会的諸実践においてであると主張したことである。それゆえルフェーブルの構図は、物質的な基礎が依然としてその力と特徴を保持するような場所構築の諸過程に対する検討を可能とするのである。しかしその過程において、場所構築の諸過程を通じた政治的動員は物質的諸過程と同様に表象と象徴の領域の諸活動にも多くのものを負っており、それらの間にはしばしば分裂が生じるということをもわれわれはまた理解している。場所への忠誠は、その場所における人々の日常的諸実践にほとんど共通性がないような環境においてさえ、政治的意味を持ち得るし、また持つのである。例えば、パリ・コミューンの蜂起にはそうした要素があった。一方、「ニューヨーク市民」といったカテゴリーが、その場所を占める数カ国語を話す数多くの人々にとって意味をなしうるという事実は、現場におけるものと同様に精神における場所構築の諸活動を通して動員され行使されうる政治的権力というものを証明している。

したがってここには物質的、表象的、象徴的な諸活動を横断して弁証法的に展開する場所構築をめぐるポリティクスが存在する。そしてそれらの諸活動は、諸個人が場所に投資し、その投資によって彼ら自身が集合的にみずからの権力を獲得する様式の中に、その特徴を見いだすのである。そうした投資とは、血と汗と涙と、そして労働からなるものである（実体的な場所を生産する仕事を通じた帰属感情の構築）。あるいはまた、場所の特定の質や地方土着な伝統の保護を通じた情感的忠誠を言説的に構築することであり、場所の象徴を称揚しまた（建造環境における工芸品のような）それ自体場所の象徴となるような新たな芸術作品でもある。そして共同体や民族などのあらゆる政治的諸価値と場所との絡み合いが作用し始めるのは、まさにこの範域においてなのである。

しかしこうした活動は、その政治的、社会的、生態学的な諸結果がいかなるものであれ、「蓄積のための蓄積」という目的が何の論争をも引き起こさず、また何の抑制も受けないままでいるような世界にとどまり続けるのである。そして場所をめぐる権力の脱中心化の兆候が数え切れないほど存在する一方で、同時に多国籍企業や金融諸機関における権力の再集中へ向かう強力な動きが存在する（Harvey 1989）。多国籍企業や金融諸機関の権力の行使は、かつてない規模における場所の破壊と侵略と再構築を意味している。現存する場所の存続可能性は、資本主義的発展における空間諸関係と時間地平のラディカルな再組織化と結びついた生産、消費、情報フロー、コミュニケーションの物質的諸実践の変化によって強力に脅かされてきたのである。

場所の再構築の必然性は、場所が表象されかつそれ自体が表象となるという様式に対するのと同様に、空間的諸実践に対してもジレンマを生み出してきた。想像の共同体が容易に理解可能となってきたのは、そのようなコンテクストにおいてなのである。場所を再構築しようとする熱病のような試みは、表象の場所の建設（例えばスペクタクルや消費主義の新たなモニュメント的性質）や、新たな物質的、社会的諸実践に対する防禦としての想像の共同体のねつ造などで満ち満ちている。しかし、新たな共同体主義的ポリティクス（ロ

ーティやアンガーのようなポストモダニストの思想家たちに見られるライト・モティーフである）に暗黙のうちに含まれる排他的な壁の建設は、確かに生産、消費、交換および再生産の諸関係に介入するかもしれないが、しかし貨幣の普遍化する権力に対しては常に浸透性をもっている。そして一方で同時にそれはますます排他的となり、それゆえ貨幣を抑制する集合的キャパシティを失ってゆくのである。

このことは私が『*The Condition of Postmodernity*』（Harvey, 1989）において説明した規則へと私を引き戻す。対抗的な運動は一般に空間を支配することよりも、場所を組織し支配することに長けている。ポストモダンのポリティクスが強調する「他者性」や「リージョナルな抵抗」といったものは、とりわけ場所において豊富なものとなりうる。しかしそれらは、断片化された普遍的な空間にまたがって資本蓄積をまとめあげる資本の権力によって容易に支配される。場所に根ざしたポリティクスは、たとえそれが失敗するべく運命づけられているとしても、自らアピールするのである。

これは興味深くもレイモンド・ウィリアムスが彼の三部作の一つ『辺境』において取り組んだ中心的問題に他ならない。『マノドへの戦い』の特徴の一つは次のようなものである。

> すべての公共政策は…文化と社会システムと経済秩序を再構成するこころみである。それらは実のところ、すでにその目的と存立可能性の限界に到達してしまったものなのである。かくして私はここに座り、二重の必然性を眺めるものである。第一に、この帝国の、輸出されるべき、分割された秩序は終わりつつある。そして、残りのあらゆる社会的諸力、あらゆる政治的編成は、そうした秩序を再構築し、再び制定するため徹底的に戦い、より親密な世界を回復するという不可能な試みにおいて、繰り返す危機を通じて常に一層深く動くのである。それゆえ二重の必然性なのである。それらは失敗に終わり、また他の何物にも挑むことはないのだ（Williams, 1979b, p. 181）。

それでは、こうした必然性を打ち破る途はないのであろうか。

結　論

場所は、空間や時間と同様に、社会的構築物であり、またそのようなものとして読まれ、理解されなければならない。人間の条件についてのこの字義通りでもありまたメタフォリカルでもある地理学の唯物論的な歴史を提供する方法が存在する。それは孤立主義的な共同体主義的ポリティクスの途方もない理想や、非－排他的であるがゆえに普遍的な解放的ポリティクスのジレンマを明らかにし、空間的に差異づけられた他者性の生産に光を当てる方法である。

それにしても私はモダニズムやポストモダニズムにほとんど言及することなく場所の意義を考察してきた。私は部分的にはわざとそうした戦略を採った。なぜなら両者の対立が進行してきた様式は、根本的な問題を露呈させるよりもむしろ不明瞭なものとしてしまうと考えられるからである。さらにそうした諸概念をめぐる戦いは、大まかには「文化的大衆」（放送メディアや映画、劇場、造形芸術、グラフィックアート、絵画、大学、出版社、文化諸機関、広告および情報産業などで働く人々を指す言葉で Bell, 1979 より借用した）の中に限定されるものである。ポストモダニズムが労働組合員やソーシャル・ワーカーやヘルス・プロヴァイダー、そして失業者やホームレスの関心にのぼることはほとんどない。ラジニーシュの宗教のように、ポストモダニズムは一部の特権階級の人々が夢中になっている問題のように思われる。とはいえ文化的大衆は、ポストモダニズムの旗印のもとで、一般的重要性を有する政治的・イデオロギー的闘争の大部分――反－人種主義、フェミニズム、民族的アイデンティティ、宗教的寛容、文化的脱植民地化などの――を自らの中に取り込んできた。しかし文化的大衆におけるポストモダニズムは、上記の観点からみれば、長いこと資本主義の政治経済と文化の中心的特徴であった断片、差異、他者性という事実に迎合し、それらと折り合いをつけるものとみなされるのである。しかし一方で文化的大衆における「言説」や「表象」への傾倒は、いかにして抑制や抑圧や搾取が受け入れられ得るのかという問題への新たな次元を加えるものでもあった――それはそれ自体として取り上げられるならば他の形態の社会的実践とのつながりを失わせる恐れがあるが、ルフェーブル的な定式化に着実に投げ返されるならば多くの学ぶべきものを持つような次元である。実際、文化的大衆においては社会生活の他の多くの諸局面よりも様々な形態の抑制や抑圧に多くの焦点が当てられてき

たと述べることは正しいと思われる。

この後者の観点から、民主化され大衆に基盤を置いた将来のポリティクスのある種の前衛にとっての基地 home として文化的大衆を理解することも可能ではある。たとえこの議論が間違っていたとしても文化的大衆のポリティクスは重要である。なぜなら彼らは象徴的秩序や想像力の範域、表象の諸形態を重要なやり方で定義し、境界づけるからである。ポストモダニズムが解放者であり文化的大衆における脱構築的な力を持つという主張は、それゆえ真面目にとりあげられねばならない。しかしここには二つの問題がある。一つは文化的大衆における権力への闘争は、全くその場限りのやり方での脱構築論者によるポストモダンのレトリックの利用に終わってしまい、少なからぬ主張が全くの知的・政治的な日和見主義の傾向にあることである（きわめて多数の二流のアングロ系白人男性がポストモダンの時流に乗って彼らの同業者連中の中でスターダムにのし上がってきた）。第二の問題は、相対的に同質で特権的な階級編成の中で戦いがおこなわれているということである。そのため階級的抑圧の問題は、常に検討事項にはのぼるものの、例えばフィリピンやメキシコの女性工員の場合ほど強烈にも個人的にも感じられていないのである。

モダニズムとポストモダニズムに関する論争全体の階級的位置づけについての考察は、ポストモダニストの主張に対するより根深い異議にまでも行きつくことになる。文化的大衆は、その階級的位置によって、スパイアー（Speier, 1986）が 1930 年代について研究したようなホワイトカラー労働者の特徴を多く備えている。集合的には、われわれは「［われわれが］みずからのものと考えうる道徳的伝統に対する心強い支持を欠く傾向にある」。それゆえわれわれは、みずからの価値を社会における他の支配的な関心との提携から引き出すような「価値の寄生虫 value parasites」になりがちである。1960 年代、文化的大衆は労働者階級の運動との提携から多くのインスピレーションを引き出したが、労働者階級に対する政治的攻撃とそれによる運動の衰退は文化的大衆を切り離し、貨幣権力と個人主義と企業家主義をめぐる彼ら自身の関心を形作らせることとなった（Harvey, 1989, pp. 347-349）。そして彼ら自身の関心は、彼ら自身が生み出したもの――表象、象徴的形態、イメージなど――によって限定されていくのである。

これらすべてが私を場所の問題へと連れ戻すのである。文化的大衆における独立したポリティクスのもっとも力強い要素は共同体や民族、そして場所の意味と質に強力に焦点を当てることである。場所のアイデンティティとローカルな伝統を形作ることは、その多くが文化的大衆の中の労働者（小説家と映画制作者から観光パンフレットのライターまで）の範囲内にある。それゆえそうした形成（ローカルな言語や地方史の感覚を絶やさぬようにする大学から博物館、文化的イヴェントなどにいたるあらゆるもの）によって場所のアイデンティティやローカルな伝統は強力な制度的諸形態を帯びることになる。文化的大衆が彼ら自身の内的諸価値を探求すればするほど、それはみずからを場所の政治経済学と文化的ポリティクスに提携させていくのである。その結果として過去 20 年の間には、そうしたトピックに関する著作があふれ（例えば Agnew and Duncan, 1989; Davis et al., 1990; Liburne, 1989; Pred, 1990; Probyn, 1990; Tindall, 1991 を見よ）、また文化的大衆の中での場所と結びついた文化運動を支持する一連の政治的諸活動（東欧の革命におけるハベルのような文化人が果たした非凡な役割を含む）が台頭してきたのである。文化的大衆が労働者階級の運動との結びつきを断念して、しかも資本主義的なブルジョア文化へ直接的に従属する立場を避けようとするにつれて、それは場所の文化的ポリティクスとますます同一化していったのである。

しかしながらこれらすべてのことが肯定的な光の中に投じ入れられねばならないというわけではない。他なる場所のステレオタイプはメディアの中で瀉血をともなう悪徳の諸形態の一つとされるものである（その点を知るにはフランス人に関する『サン』紙の記述を読むだけでよい）。排他的でステレオタイプな様式による他者の定義は自己－定義のための最初の一歩である。ハイデッガーが示すように、場所の再発見はあらゆる進歩的なポリティクスの構築の機会と同じだけ多くの危険をも提出する。『オリエンタリズム』の中でサイードが証明しているように（Said, 1978）、脱構築とポストモダンの衝撃は確かにおぞましいほどにステレオタイプ化された他なる場所に対する攻撃の手段を提供してきた。しかし文化的大衆の仕事全体における公的な観点や表象、ポリティクスについては大きな問

題が存在するのであり、その点に関しては死にものぐるいで立ち向かう必要がある。

そもそも場所はポストモダニティによって発見されたものではない。場所やなわばり、ローカル・アイデンティティや国家、地域、都市をめぐるポリティクスは、資本主義の不均等な地理的発展において常に存在してきたし、またきわめて重要な問題であった。文化的大衆のレトリックやポリティクスのレトリックにおける重層的な意味をともなった場所の再発見はこの点で重要なものであり、それは今や世界の変化が場所の政治経済学や文化的ポリティクスを過去においてよりも一層重要なものとしたという意味において重要なのではない。しかし後者の命題もまたある意味では真実である。なぜなら場所の安全が脅かされ、資本蓄積を軌道に乗せておく命がけの投機的ギャンブルの一部として世界地図が再編されるのは、時間－空間的圧縮の容赦ない作用とここ数年われわれがさらされているあらゆるリストラに直面したことによるからである。

そのような安全の喪失はオルタナティブへの探求を促すのであり、そうしたオルタナティブの一つは、場所における想像の共同体と実体的な共同体の双方を創出することにある。いかなる種類の場所をどのようにして創造するかという問題は、政治的生き残りと同様に経済的生き残りのためにも避けられないものとなる。ボルティモアやシェフィールド、リールの市長に話しかけてみたまえ。そうすればこのことが過去数年間の彼らのまさに関心事であったことがわかるだろう。文化的大衆のポリティクスが考察に値する重要性を持つのも、またここにおいてなのである。なぜなら、もしマルクスが主張したように、あらゆる労働過程の終わりにおいて、われわれは最初の想像力の産物であるような結果に到達するならば、われわれが将来の共同体と場所をどのように想像するのかということが、われわれの将来となるであろうジグソーパズルの一部となるのである。ラジニーシュプラムは人々の想像力の中に存在したのであり、人間の潜在的な運動にとらえられた大衆の想像力をつかんだのである。そして彼らはそれを一時的な場所とするべく一心に働いたのである。そしてこの場合のように、たとえ想像力と現実化との間に多くのズレがあったとしても、また反対されたり信頼を失ったりという多くの意図せざる結果を招いたとしても、将来をどのように想像し、どれほど真剣にそれに取り組むのかという問題は常に課題として存在するのである。

そうした観点からモダニズムとポストモダニズムとの葛藤や、同様に場所をめぐる政治－経済的ポリティクスと文化的ポリティクスとの葛藤は、場所の創造という問題に関して多くのことを教えてくれる。しかしすべてのゲームは、われわれがその教訓を学び、それに基づいて行動する準備がある場合にのみ価値を持つのである。そうした教訓の一つは、エリック・ウォルフがたいへん力強く述べるように、場所を構築し想像の共同体を築こうとするすべての試みは「分離できる事例を止揚し、それらを通じ、それらを越えて運動し、それらが進むにつれそれらを改変する諸過程に目を向けよ」（Wolf, 1982, p. 17）というものとなるに違いない。

文　献

Agnew, J. and Duncan, J. eds. (1989): *The power of place: bringing together the geographical and sociological imaginations*. Boston, Unwin Hyman.

Anderson, B. (1983): *Imagined communities: reflections on the origin and spread of nationalism*. London, Verso. アンダーソン, B.著, 白石　隆・白石さや訳（1987）:『想像の共同体――ナショナリズムの流行と起源――』リブロプロート.

Bell, D. (1979): *The cultural contradictions of capitalism*. New York, Harper & Row. ベル, D. 著, 林　雄二郎訳（1976, 1977）『資本主義の文化的矛盾（上）（中）（下）』講談社.

Boyer, C. (1988): The return of aesthetics to city planning. *Society*, 25 (4), 49-56.

Davies, M., Hiatt, S., Kennedy, M., Ruddick, S. and Sprinker, M. eds. (1990): *Fire in the hearth: the radical political economy of place in America*. London, Verso.

Dovey, K. (1989): The quest for authenticity and the replication of environmental meaning. In D. Seamon and R. Mugerauer (eds) *Dwelling, place and environment: towards a phenomenology of person and world*. New York, Columbia University Press.

Fitzgerald, F. (1986): *Cities on a hill: a journey through contemporary American cultures*. New York, Simon & Schuster.

Harvey, D. (1982): *The limits to capital*. Oxford, Basil Blackwell. ハーヴェイ, D. 著, 松石勝彦・水岡不二雄ほか訳（1989, 1990）:『空間編成の経済理論――資本の限界――（上）（下）』大明堂.

Harvey, D. (1985): *The urbanization of capital*. Oxford, Basil Blackwell. ハーヴェイ, D. 著, 水岡不二雄監訳（1991）:『都

市の資本論——都市空間形成の歴史と理論——』青木書店.

Harvey, D. (1989): *The condition of postmodernity*. Oxford, Basil Blackwell.

Harvey, D. (1990): Between space and time: reflections on the geographical imagination. *Annals of the Association of American Geographers*, 80, 418-34. ハーヴェイ, D.著, 堤 研二訳 (1997) :「空間と時間のはざまに——地理学的想像力に関する省察——」.『空間・社会・地理思想』 2.

Hayden, D. (1981): *The grand domestic revolution: a history of feminist designs for American homes, neighborhoods and cities*. Cambridge, MA, Massachusetts Institute of Technology Press. ハイデン, D. 著, 野口美智子ほか訳 (1985) :『家事大革命——アメリカの住宅, 近隣, 都市におけるフェミニスト・デザインの歴史』勁草書房.

Heidegger, M. (1966): *Discourse on thinking*. New York, Harper & Row.

Heidegger, M. (1971): *Poetry, language, thought*. New York, Harper & Row.

Johnson, C. (1974): *Utopian communism in France: cabet and the Icarians*. Ithaca, Cornell University Press.

Kern, S. (1983) : *The culture of time and space, 1880-1918*. London, Weidenfeld & Nicolson. カーン, S. 著, 浅野敏夫訳 (1993) :『時間の文化史——時間と空間の文化：1880－1918 年／上巻』, カーン, S. 著, 浅野敏夫・久郷丈夫訳 (1993) 『空間の文化史——時間と空間の文化：1880－1918 年／下巻』 法政大学出版局.

Lefebvre, H. (1991): *The production of space*. Oxford, Basil Blackwell.

Lilburne, G. (1989) : *A sense of place: a Christian theology of the land*. Nashville, Abingdon Press.

Logan, J. and Molotch, H. (1987): *Urban fortunes: the political economy of place*. Berkeley, CA, University of California Press.

MacCannell, D. (1976) : *The tourist: a new theory of the leisure class*. New York, Schocken .

Marx, K. (1964) : *Economic and philosophic manuscripts of 1844*. New York, International Publishers. マルクス, K. 著, 城塚登・田中吉六訳 (1964) :『経済学・哲学草稿』 岩波書店.

Marx, K. (1967) :*Capital vol. I*, New York, International Publishers. マルクス, K. 著, 資本論翻訳委員会訳 (1982～1983) :『資本論 1 ～ 4』 新日本出版社

Pred, A. (1990): *Making histories and constructing human geographies : the local transformation of practice, power relations, and consciousness*. Boulder, CO, Westview Press.

Probyn, E. (1990): Travels in the postmodern : making sense of the local. In L. Nicholson (ed.) *Feminism / postmodernism*. New York, Routledge.

Relph, E. (1976): *Place and placelessness*. London, Pion. レルフ, E. 著, 高野岳彦・阿部 隆・石山美也子訳 (1991) :『場所の現象学——没場所性を越えて——』筑摩書房.

Relph, E. (1989) : Geographical experiences and being-in-the-world : the phenomenological origins of geography. In Seamon D., and Mugerauer, R. eds. *Dwelling, place and environment: towards a phenomenology of person and world*. New York, Columbia University Press.

Rose, G. (1990): Imagining Poplar in the 1920s: contested concepts of community. *Journal of Historical Geography*,16, 425-37.

Ross, K. (1988): *The emergence of social space: Rimbaud and the Paris Commune*, Minneapolis, University of Minnesota Press.

Said, E. (1978): *Orientalism*. New York, Columbia University Press. サイード, E. 著, 板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳 (1986) :『オリエンタリズム』平凡社

Sale, K. (1990) What Columbus discovered. *The Nation*, 22 October, 444-446.

Sandel, M. (1982): *Liberalism and the limits of justice*. Cambridge, Cambridge University Press. サンデル, M. 著, 菊池理夫訳 (1992) :『自由主義と正義の限界』 三嶺書房.

Speier, H. (1986): *German white collar workers and the rise of Hitler*. New Haven, CT, Yale University Press.

Tindall, G. (1991): *Countries of the mind: the meaning of place to writers*. London, Hogarth Press.

Tuan, Y.-F. (1977): *Space and place: the perspective of experience*. Minneapolis, University of Minnesota Press. トゥアン, Y-F. 著, 山本 浩訳 (1988) :『空間の経験——身体から都市へ』 筑摩書房.

Veblen, T. (1967): *Absentee ownership*. Boston, Beacon Press.

Williams, R. (1960): *Border country*. London, Chatto & Windus. ウイリアムズ, R. 著, 小野寺 健訳 (1972) :『辺境』講談社

Williams, R. (1979a): *Politics and letters*. London, New Left Books.

Williams, R. (1979b): *The fight for Manod*. London, Chatto & Windus.

Wolf, E. (1982): *Europe and the people without history*. Berkeley, CA, University of California Press.

Young, I. (1990): The ideal of community and the politics of difference. In L. Nicholson ed. *Feminism / postmodernism*. New York, Routledge.